

向を、彼等は時に応じてみせたのであるが、その動向は強固に休止していた。たとえ動いたとしても微々たるものであつた。それはちようど彼等のある者がアラビア語の位置にペルシヤ語を取つて代らせようとする行為の如きものであつた。当時、アラビア語は正規の言語であり、宗教の言葉であり、学問の言葉であつた。Ma w ā l ī はアラビア語を学び、そしてそれは自國語の如くに洗練されたものであつた。」と、

私は、この文章をもつて、この資料紹介を終らうと思ふ。（9月16日）

ペルシヤ美術展から

吉田光邦

真夏のテヘランの博物館はいつもひつそりとして、黄色のカーテンが印象的であつた。明るく輝くばかりの光がいつはいに室にあふれているなかで、私は幾日も先史時代にはじまる豊富な蒐集を見歩いていた。金ボタンの制服の守衛達も、外観はいかめしいけれども、たえず異邦の者にも笑いかけ、写真をとつたりノートをとつたりしていても、うるさく干渉することもなかつたし、折々には見物に来ている人たちが私につきまとうのを、たしなめてくれたりもした。日本では全く見られない大きな窓から、豊富に明るく流れいる自然光が、すべての陳列品を微細な点まで光らせていたのである。そして時には許されて完備した図書室で、いろいろの書をくりひろげてみたりもしたのであつた。

そうした明るいペルシヤの太陽のもとでみた忘れ得ぬ美しさを示す品々に、この度再びめぐりあつた時、その印象の余りに異なるのに、私は驚かなければならなかつた。ああした一例から光を当てたりスポットで浮び上げたりする展観は、断じて中近東の乾燥地帯に生れた美を観る態度ではあるまい。陽光の下で生れたものは陽光に帰してやれ。湿つぽい間接光の中では、あの透明な青緑色や黄色もその輝きを失つているのである。金の輝き、銀の輝き、それらはすべてあの降りそそぐまばゆい陽光のもとで、はじめてその豪華な美しさを示すのだ。グルガン出土の大きな水差（目録281）は、たしかテヘランでは二階の中央、東西の窓から明るい光の入る中で、四方ガラスのケースの中央に堂々と置かれていた。そしてラスターの強い光沢が強烈な印象を与えるものであつた。だがここではせまい櫛の隅に押しこめられ、ぼんやりした光がわずかに文様を浮はせているにすぎず、わびしいばかりであつた。

こうした陳列は日本のデザイナーのさかしらであろうか。ルーブル展で示された展観形式の無反省な模倣であろうか。しかしあれは柱頭は柱頭に、家具は家具の位置に、すべてが本来あ

るべき位置に置かれたのであつた。スポットなどは仮想の建築物内部へ、さしいる光の方向からにのみ用いられるという、正しさがあつた。だがこのペルシャ展はそうした意味もないようである。ただ日本人好みの茶室的な光と空間で、物を観ようとする態度であるとしか思えぬのである。それ故に写真で示されているベルセボリスの柱頭像などのもつ巨大な量感と力強さと、陶器などに見られる印象とがつながらなかつたと語る人のあるのも無理ないことである。こんな展覧の形式ひとつにも、案外私どものもつている判断の立場が、客観的なつもりでいて実は相当に色濃く、日本的な立場に染められているという事が出てしまうようだ。例えばペルシャ陶器。日本では陶器好きの人はなかなか多い。私の知人にもかなりある。その人々が行つてきた感想を聞くと、ほとんど異口同音に“中国の陶器の影響がすい分ありますね。”という。ではどれがそうですか。という大い答につまつてしまうのである。ペルシャ陶器が中国陶器に影響されたということは、殆ど定説のようである。成程多くの中国陶器がペルシャにもたらされたし、これを珍藏する人も多かつた。それは文献もあるし実物もある。だからといつてそれだけでは影響とはいえないはずである。

影響説は普通は文様の類似で説かれている。植物、或は動物文様の類似。しかしそれも余りに素朴ではないか。類似のあることから直ちに影響を帰結することはすこし単純すぎる。あの愛すべき姿態をもつた騎馬人物を用いた陶器文様。そうしたものを創りあげた系列については黙したままで、単なる植物文様などの類似から影響を結論するのは早計であろう。乾燥地帯だつてオアシスにはさまざまの花が咲き乱れているのである。

それにイスラムはキリスト教以上に厳格な服従の宗教である。キリスト教では美術は信仰を高め、宗教の本質を表現する役目を負うた。しがしイスラムでは美もまた絶対的な服従の手段であつた。イスラム世界の人々の生活は、今日でもなお厳密な戒律の呪縛の上に成立している。生活の思想は即イスラムである。すべてのものはそのなかで生れたのである。すべてのものはそうした律法の中でのみ形成され生存を許されたのである。

私どもはそうした厳酷な宗教体験を未だもつたことのない歴史の上に生れてきている。すべてのものに影響され、すべてのものと調和して生きてきたのである。だからいろんなものを取り入れることはごく普通のことである。それで影響はいつも受身のものとして考えられている。西欧の人々のいう影響は能動的な意味を強調する。すこしニュアンスが違うようである。こんな点にも私どもが知らず知らずのうちに身につけた、日本風の思考が働いているようである。だからキリスト教世界の美術を眺めるのと同じ態度で、このイスラム世界のものも考えてみる態度、イスラム内部での創造の系列を明かにしてみる態度が、一応私どもには必要ではない

か。私どもの世界が中国に影響されたからといって、イスラムも同様であるはずだという前提を保証するものは何もないのである。そんな気持で眺めていると、またいろんな特質が考えられて、なかなか興味深いのである。一連の先史土器における山羊と幾何学的文様の共存の意味は、何を反映したものであろうか。そうして動物文様が一般に具体的でリアルな表現をもつていて、怪獣的な表現の少ないことも注意されよう。もちろんペルシヤには例のグリフィンがあるけれども、それとても各種の動物の特徴を寄せ集めて構成したものにすぎず、はつきりとそれぞれの部分が指摘できるのであつて、そんなに空想的なものではないのである。

それから陶器にあつて、普通に自然釉といわれる体のものが全くないことを注意したい。そして目録150の青釉山羊文壺は前8世紀という出土年代を信するならば、最古の人工釉である。しかしこの壺は文様や青釉からみて、もつと新しく前3~4世紀というべきであろう。自然釉のないことは窯の構造に由来するのである。即ち円筒直焰の吹きぬけの窯が用いられていたためである。中国でも殷から西周まではこれと同様の窯で焼いていたのであつた。日本の弥生もそうである。自然釉は斜焰か閉された窯ではじめて生れるのである。

ルリスタン銅器に鉄との併用品があることは、鉄の利用法についての一暗示となろう。また精細な青銅器の細工物のあるものは、蠟型鋳物としか考えられぬ体のものである。蜜蠟の利用から考えれば、それは当然のことといえるかもしれぬ。

青年ケセルクセスの像はラピスラズリのねりものとして、人々の眼をあつめていた。これはラピスラズリを粉末として膠結させたものであるが、膠結剤に何を用いたか—恐らくゴムとか樹脂のたぐいであろう。そしてこれは祭するところ型押成型であり、多数が造られたものである。それは王権の象徴として彼の臣下に授けられたものではあるまいか。ラピスラズリというのもまだはつきりしていない鉱物である。しかし、中近東で採掘されていたものは珪酸塩とナトリウムの硫化物、硫酸塩から成るものといわれている。その色調は今日ではウルトラマリンと呼ばれるものであるが、その成分の小差によつて緑←→青と変化するのである。一方ラジュリ、アジュライトと呼ばれる青色鉱物がある。これは炭酸銅で、やはり成分の差によつていわゆるマラヤイトグリーンから青にまで変りうるのである。この二つは色調は酷似し、しかもともに粉末として顔料に用いられるために、よく混同されて用いられているのである。

だから外観からでは区別しにくい。しかしウルトラマリンは硫黄を含むという特色がある。それで銅などと混用すると硫化物となつて黒化するわけである。それゆゑ硫化物を作るような金属とは併用することができない。またアルカリに対する抵抗力の強いのも特徴とみられよう。

そのほかに金工の問題、アストロラーベで象徴される星占術、パネル等に画かれた蜀山絵、

木象眼の問題などいろいろ考究すべきものが多い。パネルや小箱に塗られた油先りのする塗料は、私どものもち帰つた同種のをスペクトル分析で調べることによつて、鉛を含有するいわゆる密陀油風のものであることがたしかめられた。例の正倉院のものと同じ手法とみられるわけである。

こうして考えてゆく時、まだ知らぬものが何と多いことであろう。ガラスもそのひとつである。中近東のガラスはソーダ系であるけれども、まだいろんな金属塩が同時に混ぜられているようである。しかしそれらはつきりせず、時代的な先後も十分に判らない。イスラム世界に残された問題は、まだ無熟といつてよいのであろう。

JACQUES DUCHESNE-GUILLEMIN : THE WESTERN RESPONSE
TO ZOROASTER, OXFORD 1958.

伊藤 義 教

This is the Ratanbai Katrak Lectures delivered in 1956, which however is supplemented in the Postscript with several important results published thereafter up to September 1957. Besides, the "Lectures" have recently sent to world various works likewise brilliant, such as E. Benveniste's The Persian Religion according to the chief Greek Texts, 1929; H.W. Bailey's Zoroastrian Problems in the Ninth-Century Books, 1943 and W. B. Henning's Zoroaster, Politician or Witch-doctor, 1949.

As a well known Iranist, Prof. J. Duchesne-Guillemin of the University of Liège is also an able and talented advocator of Prof. G. Dumézil and has published, since before and after Les Comosés de l'Avesta, 1937, many works microscopic or macroscopic. Besides a fine lot of Iranistic, Hittitic and other thesis and articles appeared in various magazines and periodicals, the field of his activities covers so large an area that it has extended from Zoroastre, Etude critique avec une traduction commentée des Gâthâ, 1948; Ormazd et Ahriman, 1953; La Religion Iranienne 1957, etc., further to various books and articles concerning Paul Valéry.

To come to the present work, The Western Response to Zoroaster is divided into 6 chapters, viz. I. the Pre-History of Iranian Studies; II. the Indo-Iranian Perspective; III. the Amesha Spentas; IV. the Great God and Zoroaster's System; V. Iran and Greece, and VI. Iran, Israel, Gnosticism - to which chapters are added the above stated Postscript, and a Bibliographical Index. In the first chapter, the author depicts mainly how Zoroaster has been understood and interpreted with the Greek and the Christians as well as in the Western Medieval times, etc. But the year 1832